

## 編集後記

今年度も学生論集を刊行することができました。以下、これまでに至る過程を概観することになります。

今年度の学生懸賞論文は、79編の応募がありました。昨年度の応募総数60編でしたので、約1.3倍増加したことになります。

猶、応募者の所属学部は以下の通りです。

表1 学生懸賞論文応募者所属学部一覧（注：団体の場合には、代表者の所属学部にも算入）

	経済学部	経営学部	社会学部	文学部	法学部	全学部総計
2005年度	22	2	18	14	4	60
2006年度	26	4	11	19	13	79

上記の表1をみると、社会学部で応募数が減少した外は、いずれの学部でも応募者が増加しており、特に法学部では前年比約3.2倍の大幅増となり、経営学部を除く他学部と並ぶ応募数となりました。

経営学部からの応募数も昨年度の2倍の増加を見ましたが、昨年度の編集後記にも書かれているように、全体から見るとその数に寂しさを覚えます。

応募総数79編のうち、今年度予備審査に通過したものは34編でした。予備審査通過率は、昨年度が50%、今年度は約43%でしたので、大凡半数ほどが本審査にたどり着いたことになります。

審査は、学生論集刊行委員会が予備審査を行った後、応募学生の所属ゼミ担当教員以外の教員による本審査が行われました。予備審査では、文章の基本的な問題・著作権上の問題・内容およびその他の基本的な問題を中心に審査をしました。

今年度の予備審査では、誤字・脱字だけでなく、主語と述語が対応していない等日本語の文章として問題があるもの、論理矛盾を起こしているもの、そもそもの問題点が判然としないもの、問題点に対する一応の答えを述べて

はいるが根拠が不明なもの、問題提起をしながらその問題に答えていないものなどが多く見られました。特に「問題提起をしながらその問題に答えていないもの」では、結論が単なる感想文やスローガンで終わってしまっているものが多かったことは大変もったいないことです。

本審査においては、昨年度と同様、今年度も論文に対する評価が分かれ、その集約に頭を悩まされました。その結果、学長特別賞及び優秀作はなし、佳作6編、準佳作4編となりました。

膨大な量の資料を集め又は調査を行い、分析・検討し、自己の主張を論理的に述べるということは、長大な期間と大変な労力を必要とする作業です。このような大変な作業を「学生懸賞論文」でやらなければ、一生やらずに済むと考えるのは間違いです。

学生の皆さんが社会に出れば、大なり小なりそれが必要となる場面に出会います。会社や社会で、皆さんが自分の意見だけを主張しても聞き入れられるのは困難です。そこで、客観的資料等を「根拠」として、「相手」を説得することが必要になります。

「学生懸賞論文」を書く作業もこれと同じです。今回応募された方もされなかった方も、相手を、読み手を意識し、読み手を納得させるように書くことを心がけ、社会に出るための練習をしてはいかがでしょうか。

最後に、本論集刊行に至るまで、学生の応募論文を指導され、また、本審査依頼を御快諾下さいました教員各位をはじめ、学部事務室、教務課、総合研究所等関係各位に多大な御尽力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

2007年3月

学生論集刊行委員会

田中志津子（法学部）

前田 治郎（経済学部）

石田 易司（社会学部）

坂手 恭介（経営学部）

米山 喜晟（文学部）